

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17320069
 研究課題名（和文） 日本漢字音データベース（大字音表）の再構築と実用化に向けての実践的研究
 研究課題名（英文） Study of Sino-Japanese Database

研究代表者
 湯沢 質幸（YUZAWA TADAYUKI）
 京都女子大学・文学部・教授
 研究者番号：90007162

研究成果の概要：成果の中心は次の4点にまとめられる。

- （1） 既に実験的に研究開発し終えた、日本漢字音データベース（大字音表）の根幹となるソフト及びデータについて、それが実用に十分耐えうるかどうかを実践形式を取り入れて検証したこと。
- （2） （（1）を踏まえて）実用に耐えうるソフトの完成度を高めるとともに、それによって日本漢字音研究における基礎中の基礎となる韻鏡データを実用に耐えうるまでに再構築し、一定の完成度に達したデータベースを作成したこと。
- （3） 将来における大字音表の発展・拡充を目指した基礎的な調査、研究作業を行うことができたこと。すなわち、近い将来における大字音表への複数資料の字音データ掲載を目指して一部資料について日本漢字音の整理を行えたこと。また、同様に、日本漢字音資料の発掘や調査、及び研究を行えたこと。
- （4） 国内外の漢字音研究者の研究の便宜を図って、実用に耐えうる『韻鏡』データを載せた日本漢字音データベースをインターネット上に公開したこと。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	5,900,000	0	5,900,000
2006年度	2,100,000	0	2,100,000
2007年度	2,600,000	780,000	3,380,000
2008年度	1,800,000	540,000	2,340,000
年度			
総計	12,400,000	1,320,000	13,720,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：日本漢字音 データベース 字音表 韻鏡 聚分韻略 J I S
 第二水準 蒙求

1. 研究開始当初の背景

- (1) 日本における漢字音研究は、近世以前から今日まで盛んに行われてきた。特に近代以降は世界の中でも屈指の研究水準を誇ってきた。しかし、その基盤となる各資料の漢字音はまだ研究者全員の共有物となっていなかった。取り分けデータベースと呼ぶにふさわしいものは一つとしてなかった。なかんずく残念なのは、中国韓国・越南漢字音はともかくとしても、日本人研究者にとって言わば至宝である日本漢字音に関してその類のものが一つとしてなかったことである。また、日本漢字音研究者にとって不可欠の、各漢字の『韻鏡』図上の位置、すなわち『韻鏡』データもまた、いまだ研究者が共有し自由に利用できるものは一つとしてない状況にあった。この点において、日本漢字音研究は他研究領域に比して、基礎的研究がかなり遅滞しているの観があった。
- (2) 利用したい資料なり漢字音なりは研究者によって異なる。しかし、『韻鏡』データはどの日本人研究者にとっても必要にして不可欠なものである。すなわち、日本漢字音研究にあっては、まずはだれもが自由に使える『韻鏡』データベースを作ることが何よりも急がれることであつた。それを作ることができれば、研究者はそれまでの、みずからが一つ一つの「手作業」で行わざるをえなかった煩わしい『韻鏡』データの検索と蓄積を行う必要がなくなることになる。当然、膨大な時間と労力を節約することができる。その結果、研究そのものにその時間等を費やすことができ、研究を飛躍的に発展させることができる状態にあつた。
- (3) もとより同様に、その緊急度は『韻鏡』データより劣るとはいえ、日本漢字音そのもののデータベース（大字音表）ができれば、各研究者はさらに各種日本漢字音データを共有できるようになり、その結果、おのずと日本漢字音研究も飛躍的に発展していくことが望める状況にあつた。
- (4) 既に世界はコンピュータによる大量データ処理の時代に入っていた。日本漢字音研究の世界においても、早くからパソコン上で『韻鏡』データさらには日本漢字音データ（大字音表）を自由に使えるようになることが切望されていた。それにもかかわらず、この種の開発・研究には費用と労力が多大に必要とされることから、敬遠されていた。
- (5) 本研究代表者湯沢質幸等は、みずからの研究の発展のために、また日本漢字音研究者間における切望を担って、平成13年度より16年度まで科学研究費の支援のもとに、実験的に大字音表を完成させることに成功した。しかしながら実験に成功したことは、そのまま広く他の研究者に安心して使えるデータベースを提供できたということになるわけではない。すなわち、本研究開始当初においては、各研究者の要望に即した実用に耐えうる大字音表をまだ作成するには至っていなかった。
- (6) 日本漢字音データベースの出現は、中国韓

国等、世界各国の漢字音研究者もまた切望するものであつたが、上記のようにそれと呼ぶことのできるデータベースは国内外に皆無であつた。

2. 研究の目的

- (1) 大字音表の実用化に向けて日本漢字音データベースの再構築を行うこと。
 - ①既に実験的に研究開発し終えた、日本漢字音データベース（大字音表）の根幹となるソフト及びデータが実用に耐えうるかどうかを実践形式によって複数回検証すること。
 - ②実用に耐えうるように既開発のソフトの性能を高め、それにより高度で多量の韻鏡データを載せた、データベースを再構築すること。
 - ③実用化した日本漢字音データベースをインターネット上に公開して、日本のみならず世界の漢字音研究者の便宜を図ること。
- (2) 高度なデータベース作成に向けた基礎的な日本漢字音研究を行うこと。
 - ①将来における大字音表の発展・拡充を目指して、日本漢字音資料の発掘調査や基礎的なデータの整理等を行うこと。
 - ②大字音表への字音データの早期掲載を目指して、日本漢字音資料の内の特に重要な資料の漢字音の整理を行うこと。
 - ③上記研究の中で得た情報やデータ等を利用して日本漢字音研究を行い、その成果を公開すること。

3. 研究の方法

- (1) 先に実験的に開発し完成させた漢字音処理データ用ソフトウェアと、それに入力済みの既存のデータを、実際の運用の場を想定しつつ動かしてみ、ソフトの更なる向上を図っていく。
- (2) 登録漢字数を大幅に増やし、またそれに『韻鏡』データを付与して、漢字音データベースの基盤中の基盤を作る。同時に、それを実用に耐えうるまでの機能を持つものに作り上げていく。
- (3) 本研究参加研究者また協力者は、みずからの日本漢字音研究の経験を踏まえて、データ処理ソフトの点検や『韻鏡』データの使用勝手等を検証し、その結果を代表者に連絡する。代表者は、それを受けてソフトの向上やデータの増量等を図る。
- (4) データベースに載せるべき漢字音を持つ資料の発掘・調査等々を通して得た情報に基づいて、各人は日本漢字音研究そのものを行う

4. 研究成果

研究成果をまとめると、以下の(1)～(3)のようになる。この内(1)①②は既にインターネット上に公開しているので、内容はそれを参照されたい。(URL: <http://home.att.ne.jp/grape/palewolves/daijion/>)

また、(2)(3)に関わる成果は既にその大半を論文や著書、あるいは研究発表等で公開しているので本報告の第5項を参照されたい。

(1) 日本漢字音データベース(大字音表)を完成させたこと。約8,200字について、『韻鏡』韻図上の位置すなわち『韻鏡』データを載せたデータベースを完成させた。このデータベースには次の2つの特色がある。

①韻書として、また漢和辞典として中近世に最もよく出版され、また使われた『聚分韻略』掲載字をすべて載録していること。

②J I S第二水準までの漢字すべてを載録していること。

*その困難さ故に、異体字や難字等は現在すべてを補充していない(nsで表示)。しかし、この種のデータベースの場合、載録項目(漢字)の7乃至8割方について当該データが瞬時に検索できれば十分実用に耐えるものとされるので、未補充のまま公開した。(ちなみに相似したものとしては自動翻訳ソフトを挙げることができる。)以下に、その一部、全掲出漢字約8200字中の第1字～50字についてのデータをここに示す。

*順に、漢字通番、当該漢字、通し番号、韻鏡上の位置(馬淵一夫著『韻鏡校本と広韻索引』)、すなわち、転次・声調・等位・声母(幫滂奉明……→イロハニ……)である。

- | | |
|--------------------------|-------------------------|
| 1. 一, 1, 328d, 17入4ツ | 2. 丁, 2, 985a, 35平2へ |
| 2. 丁, 3, 1011a, 35平4へ | 3. 七, 4, 329d, 17入4ヨ |
| 4. 万, 5, 1039c, 22去3ホ | 5. 三, 6, 1411a, 40平1レ |
| 5. 三, 7, 1959c, 40去1レ | 6. 丈, 8, 1108b, 31上3チ |
| 7. 上, 10, 1561c, 31去3ソ | 7. 上, 9, 1120b, 31上3ソ |
| 8. 下, 11, 1047b, 29上2ナ | 8. 下, 12, 1551c, 29去2ナ |
| 9. 不, 13, 1286a, 37平3口 | 9. 14, 1334b, 37上3口 |
| 10. 丐, 15, 695c, 15去1又 | 11, 16, 1247b, 37上3 |
| 12. 且, 17, 670, 11平4カ | 12. 18, 347b, 11上4カ |
| 12. 且, 19, 1049b, 29上4ヨ | 13. 丕, 20, 527, 6平3ハ |
| 14. 世, 21, 525c, 13去3レ | 15. 丘, 22, 1138a, 37平3ル |
| 16. 丙, 23, 1144b, 33上3口 | 17. 丞, 24, 1076a, 42平3ソ |
| 18. ns3, 25, 565a, 29平2ツ | 19. 中, 26, 90, 1平3へ |
| 19. 中, 27, 30c, 1去3へ | 20. ns2, 28, 180, 2平3ハ |
| 21. 卅, 29, 1153c, 24去2又 | 22. 串, 30, 1178c, 24去2又 |
| 23. 丸, 31, 1474, 24平1ナ | 24. 円, 32, 1486, 23平1へ |
| 25. 主, 33, 378b, 12上3カ | 26. 丿, 34, 703d, 23入4ハ |
| 27. ns2, 35, 890c, 9入3ワ | 28. 乃, 36, 566b, 13上1リ |
| 29. 久, 37, 1331b, 37上3又 | 30. 之, 38, 404, 8平3カ |
| 31. 乍, 39, 1549c, 29去2タ | 32. 平, 40, 881, 12平1ナ |
| 33. 乏, 41, 1403d, 41入3ニ | 34. 乖, 42, 1019, 14平2又 |
| 35. 乘, 43, 1091a, 42平3タ | 35. 乘, 44, 1753c, 42去3タ |
| 36. 乙, 45, 277d, 17入3ツ | 37. 九, 46, 1328b, 37上3又 |
| 38. 乞, 47, 304c, 9去3ル | 38. 乞, 48, 386d, 19入3ル |
| 39. 也, 49, 1043b, 29上4 | 40. 乳, 50, 424b, 12上3ウ |
| 41. 乾, 51, 1496, 23平1又 | 41. 乾, 52, 2a, 23平3ヲ |
| 42. 亂, 53, 1135c, 24去1ム | 43. 了, 54, 894b, 25上4ム |
| 44. 予, 55, 629, 11平3ラ | 44. 予, 56, 312b, 11上4ラ |
| 45. 事, 57, 188c, 8去2タ | 46. 二, 58, 224c, 6去3ウ |
| 47. ns2, 59, 156d, 2入3ト | 48. 干, 60, 869, 12平3ラ |
| 49. 云, 61, 1273, 20平3ラ | 50. 互, 62, 498c, 12去1ナ |

なお、『聚分韻略』については、故奥村三雄先生の『聚分韻略の研究』の索引を一部使わせていただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

(2) 日本漢字音データベース載録に向けての漢字音データの整理

日本漢字音研究上好個の資料である『蒙求』の

字音データを分韻表の形で整理した。これは字音そのもののデータベースの一種であるだけでなく基盤となるものである。なお、本作業は、研究分担者の一人、佐々木勇氏が行った。(内容についてはホームページ参照)

(3) 日本漢字音資料調査、整理、研究
国内外において代表者、分担者全員がそれぞれ個別に行った。その成果の一つが上記(2)の『蒙求』漢音の整理である。また、その他、各研究者は学会等において活発に研究発表や、論文・図書等の執筆比公表をを活発に行い、日本漢字音研究に多大な貢献をなした(本報告第5項参照)。なお、ロンドン大学SOAS図書館で行った調査によって、同図書館所蔵になる日本漢字音資料について、以下のような成果を得ることができた。①一般開架図書においては、近世中期刊行の黄檗文献が日本漢字音資料として使用可能であること。②書画骨董収蔵品の中に、漢字音資料として有用なものがありうること。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計19件)

- 1 沼本克明、仮名書き法華經の陀羅尼について、安田女子大学大学院紀要、6号、1-18頁、2009、査読有
- 2 湯沢質幸・李承英、日韓韻書比較考、韓国日本学報、71輯、111-124頁、2009、査読有
- 3 沼本克明、日本における訓点資料の展開、訓読論、123-150頁、2008、査読無
- 4 二戸麻砂彦、二卷本色葉字類抄の同音字注、山梨県立大学国際政策学部紀要、3号、1-21頁、2008、査読有
- 5 蔣垂東、日本漢音と閩南方言—中古鼻音声母非鼻音化を中心に—、言語と文化、創立二十周年記念号、44-69頁、2008、査読無
- 6 湯沢質幸、近世中期における儒書唐音音読論、女子大國文、147号、2008、11-27頁、査読有
- 7 湯沢質幸、中近世における韻鏡と吳音漢音、國學院雜誌、108巻-11号、2007、査読無
- 8 小倉肇、『七音略』『韻鏡』の構造と原理(IV)、日本文藝研究、58巻4号、1-22頁、2007、査読有
- 9 蔣垂東、清末の日本語会話書『東語簡要』、日本語文化研究、7号、70-82頁、2007、査読有
- 10 小倉肇、『七音略』『韻鏡』の構造と原理(III)、日本文藝研究、58巻3号、1-23頁、2007、6査読有
- 11 湯沢質幸・李承英、日本の韻書と韓国の韻書、韓国日本学報、71輯、111-124頁、2007、査読有
- 12 二戸麻砂彦、今昔物語集のK入声音「装束」、山梨県立大学国際政策学部紀要、2号、1-21頁、2007、査読有
- 13 湯沢質幸、近世中期韻学における唐音、文言言

語研究51号、83～104頁、2007、査読有

- 14 蔣垂東、『日本館訳語』に反映した日本語のウ列母音、大東文化大学フォーラム、13号、21～29頁、2007 査読無
- 15 清水史、中古漢語音韻学史小考、人文学論叢、8号、93～106頁、2006、査読有
- 16 小倉肇、『七音略』『韻鏡』の構造と原理(Ⅱ)、日本文藝研究、58巻2号、1～24頁、2006 査読有
- 17 小倉肇、『七音略』『韻鏡』の構造と原理(Ⅰ)、日本文藝研究、58巻1号、1～24頁、2006、査読有
- 18 湯沢質幸、近世韻学における呉音漢音の分類と韻鏡、地域研究、27号、113～123頁、2006、査読有
- 19 佐々木勇、改編本『類聚名義抄』と三巻本『色葉字類抄』の漢音、訓点語と訓点資料、116輯、2005、査読有

[学会発表] (計6件)

- 1 二戸麻砂彦、二巻本世俗字類抄における「如音」という音注、2008. 6. 21、國學院大學 国語研究会、國學院大學
- 2 蔣垂東、日本所見三百年前の福州方言資料、世界中国語言語学会、2008. 6. 27、北京大學
- 3 湯沢質幸、古代日本における中国音教育と儒学伝教、2008. 4. 30、香港中文大學 日本語教育学会、香港中文大學
- 4 湯沢質幸、日本語における中国音、2007. 10. 17、台湾日本文芸語言学会、長栄大學
- 5 蔣垂東、外国から見た日本語辞書、語彙・辞書研究会、第20回発表会、2006. 11、三省堂会館
- 6 沼本克明、漢語字音資料としての日本訓点資料、第五十回國際東方學者會議、2005. 5、東京日本教育會館

[図書] (計2件)

- 1 佐々木勇、平安鎌倉時代における日本漢字音の研究、2009 汲古書院 本文篇1044頁 資料篇685頁
- 2 沼本克明(金正彬訳)、韓国學術院出版社、日本漢字音の歴史、2008、297頁

[産業財産権]

- 出願状況 (計0件)
- 取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ

「日本漢字音データベース(大字音表)」

<http://home.att.ne.jp/grape/palewolves/daijion/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

湯沢 質幸 (YUZAWA TADAYUKI)
京都女子大学・文学部・教授

研究者番号：90007162

(2) 研究分担者

沼本 克明 (NUMOTO KATSUAKI)

安田女子大学・文学部・教授

研究者番号：40033500

小倉 肇 (OGURA HAZIME)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：00091596

清水 史 (SHIMIZU HUMITO)

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：80170984

二戸 麻砂彦 (NITO MASAHIKO)

山梨県立大学・国際政策学部・准教授

研究者番号：60172730

岡島 昭浩 (OKAZIMA AKIHIRO)

大阪大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：50194345

佐々木 勇 (SASAKI ISAMU)

広島大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：50215711

肥爪 周二 (HIZUME SYUUIZI)

東京大学・大学院人文社会研究科・准教授

研究者番号：70255032

蔣 垂東 (SYOU SUITOU)

文教大学・文学部・教授

研究者番号：60327020

(3) 連携研究者

無し